

令和6年10月25日
国立大学法人筑波技術大学
学長選考・監察会議

国立大学法人筑波技術大学学長の業務執行状況の確認結果について

学長選考・監察会議は、国立大学法人筑波技術大学学長選考・監察会議規則第4条第1項第4号の規定に基づき、石原保志学長の令和5年度（令和5年4月1日～令和6年3月31日）における業務執行状況の確認を行ったので、その結果を公表する。

記

1 確認の経過

令和6年9月3日(火)に開催した第55回学長選考・監察会議において、以下の資料を参照し、石原学長に、令和5年度の業務執行状況について確認を行った。
その後、委員による討議を行った。

- (1) 学長就任時の所信表明書（令和2年度作成）
- (2) 監事監査報告書（令和5年度）
- (3) 大学機関別認証評価自己評価書（令和5年度）
- (4) 前回の学長の業務執行状況確認結果（令和4年度）
- (5) 学長ヒアリング用資料（2023（令和5）年度の実績）

2 学長からの業務説明

- (1) 教育
 - ① 新学部の新設置認可申請
 - ② 国際交流の再開
 - ③ 教育関係文科省補助金の獲得
 - ④ 学生生活研究会の対面開催
- (2) 研究
 - ① 研究シーズ集の配布
 - ② 研究関係文科省補助金の獲得
 - ③ 学術コンサルティング制度の創始

- ④ 統合報告書2023の作成
- (3) 社会との共創
 - ① 学外支援
 - ② 東京2025デフリンピック関係
 - ③ 社会共創取組の更なる推進
- (4) 管理運営
 - ① 学長裁量で新たな人材の配置
 - ② 常勤監事の配置
 - ③ 学外からの来訪（公的機関・外国大学）
 - ④ 教職協働の取組

3 確認結果

(1) 教育

- ① 学長がリーダーシップを発揮し、新しい学問分野を創設すること、自ら課題を克服していく学生を育成することを目指す新学部の創設に向けた設置審申請について、教職員と連携して最終段階の努力を行ったことを高く評価する。（審査において、令和6年8月28日に、令和7年度からの共生社会創成学部の設置が承認された。）一方、本学は、視覚障害者と聴覚障害者の教育について優れた資産を有しており、それを基盤として、その他の障害に対応している機関とも交流や連携を進めていく中で、共生社会の創成に向けて、より幅広い視野で、本学の位置づけや課題を見出していくことも重要である。
- ② 既存の学部の入学定員未充足については、引き続きの課題として存在している。学長のリーダーシップのもと、新学部の準備や構築と並行して、具体的な目標値と期限を設定した上での一層の取組を期待したい。
- ③ 本学は、令和5年度も、聴覚・視覚ともに文部科学省のリカレント関連プログラムに採択されて成果を上げている。今後も、社会人の実態に対応しうる教育制度を柔軟に設計して、障害者のキャリアアップを目的とした魅力ある教育を提供し、さらに国や外部組織との連携を強化していくことで、シナジー効果が生まれてくることも期待できる。

(2) 研究

本学の特色を活かした研究の取組の1つとして、日本財団電話リレーサービスとの協定に基づき、サービスに関するデータを収集し、両機関において分析と活用が進められていることは評価できる。この研究が、障害を有する学生の就職先の制限を縮小して、卒業生

が一層活躍できる場を広げる方向に展開していくことを期待する。

(3) 社会との共創・管理運営

学外組織との連携と教職協働の推進にあたり、本学の専門性を活用したいという声は重要だと考える。学生も含めて学外組織と新たな取組を行うことで視野がさらに拡大しさらなる発展や発信力の強化が期待できる。学内においては、春日地区・天久保地区間の連携や教員・職員間の協働の推進に努めていることを評価したい。

4 総括

学長選考・監察会議は、学長からの業務説明、委員との質疑応答、委員による討議等を踏まえ、令和5年度における業務の執行状況について総合的に検討した結果、学長はリーダーシップを発揮し、教職員との連携体制を構築し、本学の将来を見据えた様々な取り組みや改革を実施してきたと判断する。

特に、共生社会創成学部については、自ら社会を変えていくことができる学生を育成すること、新しい学問分野を立ち上げることを念頭に、約5年半にわたる教職協働の成果として、設置審を見据えた最終段階の努力がなされたことは、極めて大きな実績と言える。（令和6年度において設置の承認に至ったことを含めると、本学の将来に大きく影響する特筆すべき事項である。）

一方、これから新学部のスタートに向けて具体的な準備を加速させていく中、既存学部における入学定員未充足については、学長自身、高い問題意識を有しており、引き続き、喫緊の課題として、リーダーシップを発揮して取り組んでいただきたい。課題解決に向けて設置された組織による今後の検討に期待したい。

以上